

「食」が形づくる出家生活

——ミャンマーを事例として——

藏 本 龍 介

△論文要旨▽ 上座仏教の出家者は、律と呼ばれるルールによって、「食」の獲得・所有・消費方法について、種々の制限を課されている。そしてこうした律を守る出家生活こそが、上座仏教の理想を実現するための最適な手段であるとされる。しかしだからといって、出家者は霞を食べて生きていけるわけではない。ここに上座仏教の出家生活が抱える、「食」をめぐる根深いジレンマがある。それでは現実の出家者たちは、「食」をめぐる問題にどのように対応しているか。そしてそれが出家者の宗教実践をどのように形づくっているか。本論文ではこの問題について、現代ミャンマーを事例として検討する。こうした作業を通じて、宗教／世俗を二項対立的に区別する発想では捉えられないような出家者の仏教実践の一端について、具体的にはなぜ出家し、どのようなライフコースを辿るのか、そして出家者の生活の基盤である僧院組織の構造がどのように規定されているのかといった諸点を明らかにする。

△キーワード▽ 上座仏教、ミャンマー、出家者、律、宗教／世俗

一 問題設定

「上座仏教 (Theravāda Buddhism)」の出家者は、「食」をめぐる問題にどのように対応しているか。そしてそれが出家者の宗教実践をどのように形づくっているか。本論文ではこの問題について、現代ミャンマーを事例として検討する。⁽¹⁾

本特集の趣旨文にもあるように、「食」という問題は宗教研究の主題として論じられる機会は少なかった。その背景には、「宗教」と「世俗」を二項対立的に捉える考え方がるように思われる。アサド (F. Asad) が指摘するように、西洋近代出自の宗教概念は、人間の実存をめぐる形而上学的なものとして定義されることによって、人間の日常的な生き方から弁別される⁽²⁾。それゆえに宗教的実践といった場合、それが喚起するのは日常的な営みとは一線を画した時間・空間で行われるような「聖なる」修行や儀礼である。

しかし現実の人間の生き方においては、宗教的実践と世俗的実践を簡単に弁別できるものではない。それはキリスト教、イスラーム、仏教など、確立した聖典をもつ制度宗教においても同じである。制度宗教が掲げる理想がいかに高邁なものであったとしても、信徒がその理想を実現するためには、日常を生きぬくことが必要不可欠なのである。そしてその根幹には、本特集のテーマである「食」という問題が歴然と横たわっている。したがってある宗教の信徒たちが、実際にどのように「食」と関わっているのかという問題を検討することは、彼／彼女らの宗教的実践に迫ることのための一つの切り口となりうる。であると同時に、アサド以来、様々な形で試みられている西洋近代出自の宗教概念からの脱却という問題を考える上でも、重要なテーマ研究となりうるだろう。

こうした問題関心のもとで、本論文では上座仏教の出家者の仏教実践を検討する。上座仏教の出家者は、「出家」（世俗からの離脱）を志向するという意味で、いわば「最聖域」に位置する存在である。しかしそれゆえに、かえって世俗的な問題、つまり「食」に代表されるような日常生活上の問題が重くのしかかるといふ逆説的な構造もっている。それでは現実の出家者は、「食」をめぐる問題にいかに対処し、その生き方を紡ぎだしているのか。本論文ではその実態を、現代ミャンマーを事例として描き出す。それによって出家者の仏教実践の一端を明らかにす

ることが本論文の目的である。

それでは上座仏教における出家者とはどのような存在なのか。ここではまず、出家者の教義的な位置づけを確認することによって、本論文の問いを明確にしておきたい。上座仏教とは、初期仏典（原始仏典）の影響を色濃く保持するパーリ仏典（パーリ語で書かれた仏典）を聖典とする、仏教の一派である。その教義的特徴は、無執着、つまり欲望（煩惱）から離れることを究極的な理想とする点にある。なぜ欲望を離れなくてはならないのか。おいしい料理を食べ、快適な住環境で過ごしたい。いつまでも健康でいたい。愛する者と一緒にいたい。他者から認められたい。欲しいものを手に入れたい。こうした欲望は誰しもが自然ともっており、人生の原動力ともなるものである。

しかし上座仏教では、欲望は決して満たし切れないものであつて、欲望を追求することは苦しみにしかならないと説く。生・老・病・死という人間に普遍的な事実をはじめとして、この世界には何一つ自分の思い通りになるものはない。思い通りにならないことに、思いをかけ期待することは、自分で自分の首をしめるようなものである。したがって上座仏教が求めるのは、欲望から離れることであり、それによって得られる心の平安（涅槃 P. nibbāna）である。こうした欲望からの脱却は、無常・苦・無我の体験的理解によって達成できるとされる。そしてそのために「八正（聖）道 (P. ariya atthaṅgika magga)」に集約される修行方法が提示されている。

そこで上座仏教の専心的な修行者である出家者には、欲望から離れるために普段から欲望をなるべく抑えるように生きることが求められる。特に日常生活レベルで突出しているのは、「性欲と物欲にいかに対処するか」という問題である。それゆえに「律 (P. vīriya)」と呼ばれる出家者のルールの大部分は、この二大欲に駆られた言動を禁

止・制限するものである。ただし「性欲」と「物欲」は、対処の方法が全く異なる。つまり性の問題は、一切関与しないことが可能であるのに対し、物の問題はそうはいかない。簡単にいえば、性行為をしなくても生きていけるが、食べなければ生きていけない。したがって「食」を中心とした物（以下、財といいかえる）の問題は、最も基礎的にして究極的な出家生活の課題であるといえる。

それでは律が出家者に求める財との関わり方とは具体的にどのようなものなのか。主要なポイントを三点挙げておこう。第一に、財の獲得方法についていえば、出家者は財への執着を避けるために、自ら財を獲得するという手段を放棄しなければならない。つまり一切の経済活動・生産活動を行ってはならない。物質的な生活基盤を在家者の布施に依拠する乞食こじき——托鉢によって日々の生活の糧を得ること——というあり方が、出家生活の大原則である。出家者の正式名称である「比丘 (p. bhikkhu)」とは、「乞う人」を意味する。

第二に、財の所有についていえば、出家者は財の所有自体を否定されているわけではない。しかし所有できる物、量、期間には様々な制限がある。たとえば、その日暮らしを原則として薬以外の食料品を貯蔵してはならない、必要以上の袈裟や鉢をもってはならない、といった規定である。

第三に、金銀（金銭）を受領・使用してはならない、という規定がある。なぜ金銭を受領・使用してはならないかというと、金銭という何にでも交換できる万能の手段を手にすることによって、財に対する欲望が増幅するからである。また「金銭に対する神経質とも思える拒絶の姿勢は、その日暮らしを旨とする出家僧団が金を持つことに対する世間の非難を考慮してのことである」⁽³⁾という側面もある。

このように律の規定は出家者に対して、財の獲得・所有・使用について、種々の制限を課している。そしてこう

した律を守る出家生活こそが、上座仏教の理想的境地である涅槃を実現するための、唯一ではないが最適な手段であるとされる。しかしだからといって、出家者として霞を食べて生きていけるわけではない。ここに上座仏教の出家生活を抱える、根深いジレンマがある。つまり一方で、涅槃を実現するためには、律を遵守した日常生活を送る必要がある。しかしその律は「財からなるべく離れる」と出家者に要請する。したがって律を厳密に守るならば、財の必要という現実に対応できない可能性がある。

それでは現実の出家者たちは、こうした財の問題、とりわけ「食」という問題にいかに対処しているのか。具体的には「食」をいかに獲得・所有・使用（消費）しているか。そしてそれは出家生活をどのように形づくっているのか。本論文では現代ミャンマーの事例に基づき、その一端を明らかにする。その際、本論文では特に、「僧院」——特定の地域的限界（界 *Pi-sima*）にいる出家者たちによって構成され、生活・修行・日課を共にする共住集団——という単位に照準を合わせる。なぜなら現実の出家者は個人ではなく、僧院という単位で生活しているからである。つまりミャンマーの出家者たちは、僧院を単位として「食」をいかに獲得・所有・消費しているのか。これが本論文の問いである。

なお、ミャンマーでの現地調査は、二〇〇六年七月から二〇〇九年九月にかけて断続的に合計一年八ヶ月間行った。その内の約二ヶ月間は、ヤンゴン近郊の某僧院（本論文ではX僧院と呼ぶ）に出家者として滞在する機会を得た。本論文の記述は、そこから得られたデータをもとにしている。⁽⁴⁾

二 「食」の獲得方法

1 「食」の獲得という問題

はじめに、「食」の獲得方法という問題について検討する。人口約五一〇〇万人（二〇一四年時点）のミャンマーには、五三三三七人⁽⁵⁾（比丘二八二三六五人、沙弥二五二九六二人）の出家者が、六二六四九僧院に分かれて生活している⁽⁶⁾（二〇一五年時点）。ここで比丘とは二〇歳以上の正式な出家者のことを、沙弥とは見習いの出家者、一般的には二〇歳未満の小僧のことを指す。

上記の数値をもとに単純計算すれば、出家者一人を国民約一〇〇人、一僧院を国民約一〇〇〇人で養っているということになる。しかし実態はもちろんそのように単純なわけではない。なぜなら在家者からの布施というのは、均質に分配されるわけでも、固定的・安定的でもないからである。在家者は様々な動機のもとで布施を行い（あるいは行わず）、布施先も自由に選択できる。この点において、たとえば日本の檀家制度——そこにおいて檀家は、檀那寺から葬儀・法要・墓の管理といったサービスを受ける代わりに、檀那寺を経済的に支える義務をもつ——における出家者・在家者関係とは大きく異なる。

もちろん、ミャンマーにおいても村落部では一村に一僧院しかない場合も多く、結果として、檀家制度のように村の僧院と村人が持ちつ持たれつとの互酬的関係にあるように見えることもある。しかし村人の布施は義務ではないし、村人に経済的な余裕があれば複数の僧院を建てることも珍しくない。その場合、必然的に僧院を取り巻く環境は競争的・市場的になる。その傾向は、一定区画に多数の僧院が集まっている都市部においてより顕著にみられる。

表1 ヤンゴンにおける僧院規模の分布

規模(人)	僧院数	規模(人)	僧院数
1-10	1381	101-110	15
11-20	550	111-120	16
21-30	216	121-130	9
31-40	97	131-140	7
41-50	25	141-150	7
51-60	65	151-200	10
61-70	53	201-300	10
71-80	39	301-400	3
81-90	26	457	1
91-100	10	660	1
		1205	1

出所：ヤンゴン管区「雨安居僧籍表」（2003年）
より筆者作成
（データ総計 2542 僧院、1 僧院は人数不明）

それではこうした競争的・市場的な環境において、各僧院はどのように「食」を獲得しているのか。以下、ミャンマー最大都市ヤンゴンを事例として検討してみたい。⁽⁷⁾

2 布施を引き寄せる人気僧たち

二〇〇九年現在、ヤンゴンには二九四〇僧院あり、そこで五三七七六人の出家者（比丘三二四二三人、沙弥二二三五三人）が生活している。ただし一口に僧院といっても、その規模は様々である。表1はヤンゴンにある二五四二僧院（二〇〇三年時点）の僧院規模の分布を示したものである。たとえば出家者数が一〇〇人の僧院は、一三八一僧院あることを示している。

これをもてもわかるように、ヤンゴンにある大多数（全体の約八五％）の僧院は、出家者数三〇人以下の小規模・中規模僧院となっている。あくまでも目安であるが、出家者数が三〇人を超えるような大僧院のほとんどは、出家者の高等教育機関である「教学僧院（*saṅghadāta*）」であるといつてよい。ただし僧院の規模は、布施の量に単純に比例しているわけではない。つまり布施が多い僧院が、結果的に規模が大きくなるというわけではない。規模の大きい僧院（教学僧院）は、それだけ多くの布施が必要になるのは当然であるが、

逆に、規模が小さくても布施が多い僧院も多くある。規模の大きさは、僧院の活動内容に規定されている部分が大
さい。

表2 ヤンゴンにおける人気僧のタイプ

出家者のタイプ	事例
①突出した修行者	法臘が多い、教学や瞑想に長けている
②瞑想指導者	瞑想センターにおける瞑想指導者
③教義解説者	説法僧、作家、仏典講座の講師など
④現世利益的サービスの提供者	占い、予知など
⑤社会福祉的サービスの提供者	貧困層への教育など

さて先述したように、現在ヤンゴンには約三〇〇〇の僧院がある。人口も多い（約五二万人、二〇一四年）が、僧院も多い。つまりヤンゴンの僧院はある意味では熾烈な市場的環境に置かれているといえる。それではこれらの僧院はどのように「食」を獲得しているのか。この問題を考える上でまず指摘しておきたいのは、僧院によって潜在的な布施調達力の大きさが異なるという点である。そしてその布施調達力を左右する重要な要素となっているのはそこに滞在する出家者、特に住職の特徴である。この点について、たとえば日本においては、仏像・歴史的建造物・庭園など、僧院は種々の「見世物」を有している場合がある。こうした見世物はそれ自体が多くの人々を惹きつけ、それゆえに観光地となっている僧院も多い。その一方で、ミャンマーの僧院はこうした見世物に乏しい。その理由の一端は、僧院とパゴダ（仏塔）の分離にあるだろう。つまり巡礼客・観光客を惹きつけるような見世物は、パゴダに集中しているのである。それでは都市部においてどのような出家者が人気なのか。いいかえれば「市場価値」が高いのか。それを示したのが表2である。

ミャンマーでは伝統的に、「仏教的 (Mr. lokoutara)」と「世俗的 (Mr. loki)」とい

う区別がある。①～③のタイプの出家者は、「仏教的」であるがゆえに人気があり、逆に、④～⑤のタイプは「世俗的」であるがゆえに人気があるといえる。一見、矛盾した状況にみえるが、それは都市住民のニーズが多様であることを反映しているといえよう。

いずれにせよ、ここに示したような特徴をもつ出家者が住職を務めている僧院は、潜在的に布施調達力が高い。つまり都市住民は、「雨安居衣布施 (M: wazotingan hseikahludan bwe)」や、「カティン衣布施 (M: mahaboun-kahein hseikahludan bwe)」といった僧院における年中儀礼のほか、在家者の人生儀礼（出生・沙弥出家または女子の穿耳式・結婚・葬式など）といった機会において、こうした出家者（僧院）を対象として様々な布施——ヒト（労力）・モノ・カネの提供——を行う傾向にある。

ただしたとえ人気がある出家者がいるからといって、それだけで必要十分の布施が自然と集まってくるような僧院はごく一部である。それゆえに各僧院は、実際には様々な布施調達活動を行い、「四資具 (M: di: leiha 衣食住薬のこと)」をはじめとする生活必需品を確保している。以下、「食」の獲得について、その実態をみてみよう。

3 都市僧院の「食」調達活動

一般的に「食」の獲得方法は三つに区別できる。一つめは「托鉢 (M: hsunkan)」であり、これは鉢を携えて村や町の中を歩き、調理済みの料理の施しを受けることを意味する。二つめは在家者からの金銭や食材の布施のもとに、材料を調達し、僧院内で調理する方法である。三つめは在家者からの「招待食 (M: hsun kat, hsun sapin)」である。招待食とは、在家者が結婚式や葬式、あるいは家族の誕生日や命日といった機会を始めて、出家者に布施をして功德を積みたい場合に、出家者を招待して施食することを指す。在家者の家に出家者を招待することもあ

れば、在家者の側から僧院に出向くこともある。招待食を受ける人数は、数人単位から僧院全体に及ぶこともある。ただし僧院で調理するためには食材を購入する必要があるし、また在家者からの招待食も僧院側は受け身で待つしかない。したがって托鉢は、出家者が主体的に食料を調達できる唯一の手段として、重要な意味をもっている。さらに托鉢は、都市住民との関係を築くためにも重要な手段となっている。つまり出家者は托鉢を通じて都市住民と接点を持ち、そして托鉢を通じてその関係を深めることができるのである。この点についてある長老（五〇代、教学僧院住職）は、次のように述べる。

托鉢に行つて十分な食事が得られなかったからといって、次の日は場所を変えるようではだめだ。毎日通い続ければ、在家者も準備しようという気持ちになる。托鉢というものは徐々に進展するものである。たとえば初めは施食を断られても、一〇日くらい経つと、一さじの白飯を布施するようになるかもしれない。さらに時間が経つとおかずも加わる。「家に来てください」と招待食の誘いがくるかもしれない。さらに食事以外にも四資具など必要なものを支援してくれるかもしれない。托鉢には「精進 (P. vīṇa)」が必要である。

ただし一口に托鉢といっても、その方法は様々である。集団で行く「集団托鉢 (M. tan hsu)」か、個人で行く「個人托鉢 (M. taba hsu)」か、あるいは、あらかじめ托鉢に応じることを約束した家々を回る「訪問托鉢 (M. hia in hsu)」か、そうではなく在家者の家の前で立ち止まり布施をしてくれるか様子を伺う「立ち止まり托鉢 (M. yat hsu)」か、といった違いである。僧院全体で托鉢を組織化する場合もあれば、個々人に任せる場合もある。また、托鉢に向かう時間帯も様々である（朝食前か後かなど）。ここで托鉢が上手くいっている事例を一つ紹介しておく。

【事例】 B 僧院（二〇〇八年三月訪問）

ヤンゴン管区東ダゴン郡にある B 僧院は、二〇〇五年に設立された新しい僧院である。訪問時点で、比丘六人、沙弥八人が滞在していた。比丘三人が仏教講師として、沙弥たちに基礎的な仏教教育を行っていた。将来的には大きな教学僧院にしたいとのことだった。B 僧院では毎日、住職以外の出家者たちが集団托鉢の形式で托鉢に出ており、それによって毎回一〇〇人以上の食事を得ている。当然のことながら個人では持ちきれないので、リヤカーを引いて托鉢に出ている。余った食料は近隣にある孤児院を兼ねた僧院学校⁽⁸⁾に布施している。托鉢が順調である理由について、住職は次のように説明する。

托鉢のルートは、曜日毎に変えている。毎日だと準備が大変だが、一週間に一度なら準備しやすい。また、托鉢に行くときには毎日、時間どおりに行くように注意している。僧院によっては、在家者の招待食がある場合や、あるいは雨安居には托鉢に出ない場合もあるが、そのように出家者が気まぐれだと、在家者の側も準備しにくくなるからである。

托鉢にもコツのようなものがあるといえる。ただし、托鉢に困難を抱えている僧院も少なくない。たとえばヤンゴンにおいても貧困地域や僧院の密集度が高い地域に僧院が立地している場合は、托鉢場所を探して、バスを乗り継ぐなどしてかなり遠方まで行く必要がある。また近年は集合住宅化の進展によって、托鉢は以前よりも難しくなってきた。あるいは僧院規模も影響する。つまり教学僧院のように、出家者数が多くなるほど「食」の確保は難しくなる。そしてこの教学僧院の「食」確保という問題は、出家者のライフコースに様々な影響を及ぼしている。次にその内実をみてみたい。

4 「食」が形づくるライフコース

ミャンマーでは、青少年期から長期に渡って出家するのは、ほとんどが村落部出身者である。その主要な要因は、村落部における教育機会の不足と貧困問題であり、出家するタイミンクは小学校を卒業した一〇歳くらいが最も多い。つまり先に統計データでみたような多数の出家者は、仏教への関心からというよりも、むしろミャンマー社会において「食べていくため」に出家しているという側面が強い。

その後、一〇代から二〇代にかけての若い時期は、仏教教義・仏典を学び、各種の仏教試験の受験勉強をするのが一般的である。そのための教育機関となっているのが、教学僧院と呼ばれる高等教育機関である。もともと、若い出家者に対する仏典教育は、多かれ少なかれどの僧院でも行われている。しかし教学僧院の場合、教育カリキュラムやレベル別の授業などが整備されており、教学に専念する環境が整っているという点において、他の一般的な僧院とは異なっている。つまり教学僧院において教学の研鑽を積むというのが、若い出家者の生活の特徴である。そして基礎的な教学が一通り終わると、さらに専門的な教学に進んだり、瞑想修行を行ったりするなど、それぞれの興味・関心に応じて多様な道を歩む。そして機会に応じて自分の僧院を構え後進を育てる。

以上のようなライフコースの最も重要な特徴は、その移動性の高さである。この場合の移動とは、帰郷や旅行といった短期の移動ではなく、滞在する僧院を移り変えることを意味する。そして俯瞰的にみるとこうした移動には、「村落部から都市部へ」という一定のパターンが存在している。なぜなら教学僧院の分布は都市部に偏っているからである。多数の学生を抱える教学僧院を運営するためには、水や電気といったインフラのほか、多くの運営コストがかかる。こうしたコストを賄えるのは、都市部しかない。それゆえに若い出家者たちは、村落部から都市

部の教学僧院へと移動して教学の修練を積むことになる。

ただしこうした移動は、一回きりのものではない。一〇代から二〇代にかけて、出家者たちは教学僧院を何度も移り変わる。たとえば筆者が二〇〇七年三月に、ヤンゴンの国家仏教学大学（教学僧院の一種として捉えることができる）の学生五〇人（平均年齢二四・八歳）に対して行ったアンケートによれば、大学入学前に滞在した僧院数は平均して四・二僧院だった。初めに出身村の僧院で出家して、その後、約三つの教学僧院を移動した後、現在の大学へ移動した計算になる。

それではなぜ若い出家者たちは、移動を繰り返すのか。その理由は、教学僧院毎に教学のレベル（初級～上級）、得意分野（律・経・論）、教授方法、仏教試験の合格率などに違いがあるからである。そこで各出家者は、自分の教学的なニーズに合わせて教学僧院を選択する。しかしそこで必ず問題になるのは、生活環境、とりわけ「食」の問題である。先述したように、出家者数が三〇人を超えるような大僧院のほとんどは教学僧院であるが、教学僧院の中には一〇〇人を超えるような大規模なものも少なくない（二〇〇七年時点で全国に二八〇僧院）。こうした教学僧院は、そこに滞在している出家者（学生）たちに「食」を提供する僧院と、提供しない僧院の二つに分かれる。前者はヤンゴンに多いが、これはヤンゴンの経済力と人口の多さが理由である。それに対して、後者は、王朝期から教学の中心地として栄えてきたマンダレーやバコックに多い。

教学僧院がそこに滞在する出家者に「食」を提供しない場合は、出家者個人で獲得するか、もしくは、各出家者が居住する僧坊単位で獲得するかに分かれる。出家者個人で獲得しなければならぬ場合、托鉢に依じてくれる家を自分で探す必要がある。あるいは誰にでも施食している家や在家仏教徒組織を見つけて——たとえば早朝、湯気

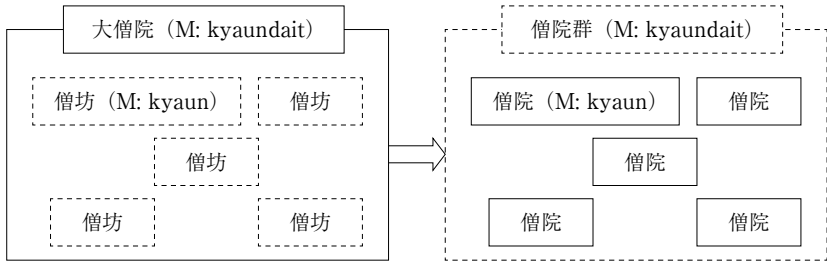


図1 大僧院（教学僧院）の解体

が立ち上っている場所を目指す——そこに托鉢に行くという方法もある。いずれも忍耐力がある作業であり、また、十分な「食」が得られないことも多い。

一方、「食」の確保を僧坊単位に委ねるといふ場合には、教学僧院の解体という現象、つまり、時間の経過と共に、その内部の僧坊がそれぞれ自律的な僧院に変質し、教学僧院全体としてのまとまりが失われていくという傾向がみられる。

僧坊単位に委ねられた場合、僧坊毎に托鉢に行き、布施を獲得するようになる。そのような生活を送る内に、僧坊毎に信者がつくようになり、僧院全体の代替わりなどを契機として、こうした僧坊が僧院として自律化するのである。その結果、複数の僧坊からなる教学僧院は、複数の僧院からなる僧院群と呼ぶべき存在となる。ミャンマー語では、こうした僧院群は大僧院と同じく「kyaundait」と呼ばれ、そしてその内部の僧院も僧坊と同じく「kyaun」と呼ばれる。したがって名称だけでは、どちらかの区別がつかない場合もある(図1)。こうした傾向は、特に大教学僧院が多いマンダレーに顕著である。

三 「食」の所有・消費方法

1 「食」の所有・消費という問題

「食」の必要という、人間の生活に根本的につきまとう問題は、第一に、「食」をいかに獲得するかという問題として現れる。しかし問題はそれだけでは終わらない。第二に、獲得した「食」をいかに取り扱うか、いいかえれば、「食」をいかに所有・消費するか、という問題がある。欲望の低減を目指す出家生活において、「食」自体が欲望の対象となるようでは本末転倒である。何のために「食」を摂取するかといえば、それは肉体を維持し、仏道修行を推進するためとされる。私が滞在していた僧院では、食事前に次のような偈を唱えていたが、その内容はこのことを端的に示すものである。

私は、正しく考察して施食を受用します。遊戯のためでなく、驕慢（力の自慢）のためでなく、裝飾（良い体格）のためでなく、莊嚴（美容）のためでなく、ただこの身体の存続のため、維持のため、飢餓病気を静めるため、最勝行（仏道修行、引用者注）を護るために受用するのです。この施食を受用することによって、前の苦痛はなくなり、新しい苦痛が起らず、私は、存続することが出来、罪がなく、安楽に過（9）ごされるでありますよう。

そこでこの原則に基づき、律では、「食」の所有・消費方法についても、事細かな規定が決められている。第一に所有方法についてみれば、第一章でも触れたように、所有できる物、量、期間に様々な制限がある。たとえば薬以外の食料を、翌日まで貯蔵してはならない。その日に受けた食事を、その日中に消費するというのが出家生活の

原則である、第二に消費方法についてみれば、与えられていないものを摂取することの禁止、正午以降の固形物の摂取の禁止（飲料の摂取は可能）、調理の禁止、在家者と共に食事をするなどの禁止など、多岐に渡る制限がある。音を立てて食事をなしてはならない、食べながらわき見をしてはならないなど、行儀作法に関する規定も多い。また、しばしば誤解されているが、食事内容についての制限は緩やかである。乞食を原則とする上座仏教の出家者は、在家者に布施されたものであれば、基本的に何を食べてもいい。肉類についても、布施するためにわざわざ殺したものでなければ、人肉や象肉など一部の例外を除いて、摂取可能である⁽¹⁰⁾。

しかしこうした制約は、出家者の現実適応能力を著しく損なうものである。それでは出家者は実際に、どのように「食」を所有・消費しているのか。この問題は、具体的には、僧院組織のあり方、いいかえれば僧院組織内部における出家者同士、および出家者と在家者の関係をいかに調整するか、という問題として現れている。そこで以下では、僧院組織の実態と問題を分析することによって、出家者が「食」をどのように所有・使用しているのかを検討したい。

2 僧院組織の構造

第一章でみたように、僧院とは特定の地域的境界（界 *Paṭṭhāna*）にいる出家者たちによって構成され、生活・修行・日課を共にする共住集団と定義でき、典型的には①住職（幹部僧）、②一般の比丘・沙弥から構成されている⁽¹¹⁾。そして住職が一般僧の面倒をみる一方で、一般僧は僧院組織の運営に必要な雑務を担うという分業がみられる。

ただし、正式な出家者である比丘と、見習いの出家者である沙弥とは、分担できる作業内容が異なる。両者の最も重要な違いは、比丘が「受具足戒式（*P. upasampada*）」と呼ばれる儀式によって、律を与えられることによって



写真

沙弥（左右）が比丘（中央）に
食事の布施をしている場面
（X僧院にて、2008年筆者撮影）

正式な出家者としての資格を得て、律に則った生活を求められるのに対し、沙弥は未だ律を授けられていない、それゆえに律の規定から自由である点にある。もちろん、見習いの出家者としての沙弥もまた、十沙弥戒¹²を守り、比丘に準じた生活を送ることが求められる。しかしこの差は実際には出家生活に大きな影響を与えており、たとえば比丘は調理してはならず、布施されていない食品に触れることもできないため、調理は沙弥が行うことになる。そのため比丘は食事をとる前に、沙弥から形式的に食事を布施してもらう必要がある（写真）。

ここで筆者が出家者として滞在していたヤンゴン近郊のX僧院の状況を紹介しておきたい。X僧院はシユエジン派の教学僧院で、筆者が滞在していた当時、一八二人の出家者（比丘四二人、沙弥一四〇人）がいた。幹部僧は、住職、顧問僧、仏教講師（七人）、托鉢管理、水管理、調理管理、食堂管理、買い物管理（各一人）で、残りが一般僧となる。これら一般僧は托鉢・炊事班に分類されている。托鉢・炊事担当は五班に分かれ、托鉢（四ヶ所Ⅱ班）と炊事（一班）を一週間毎に交代で担当する。表3は、一般僧の基本日課を示したものである。教学僧院であるため、授業や自習時間が多いが、その合間を縫う形で、托鉢や調理が行われていることがわかるだろう。ただし比丘は調理ができないため、食堂の準備などに従事することになる。

ただし出家者だけでは僧院組織は非効率的にならざるをえない。なぜなら沙弥もまた、比丘と同じく、食料品を貯蔵することも、金銭に触れることもできない——それゆえに金銭の布施を受け取ることも、金銭を用いて買い物

表3 X僧院における一般僧の基本日課

	托鉢班	調理班
2:00		炊飯 (担当2人)
4:00	起床	起床 (炊飯担当以外)
4:30	講堂にて瞑想	朝食準備
-5:00		
5:30	朝食	朝食
-6:00		
6:00	僧坊掃除	片付け(皿洗い)
-6:30		
6:30	授業	授業
-7:45		
8:00	托鉢	昼食準備
-9:30		
10:00	水浴び/洗濯	昼食準備
-11:00		
11:00	昼食	昼食 片付け(皿洗い)
-12:00		
12:00	休憩/昼寝	休憩/昼寝
-13:00		
13:00	授業/自習	授業/自習
-17:00		
17:00	雑務/自習	ジュースづくり 朝食下ごしらえ
-18:00		
18:30	講堂にて勤行	講堂にて勤行
-19:00		
19:30	授業/自習	授業/自習
-20:30		
21:00	瞑想/休憩	瞑想/休憩
-22:00		
22:00	就寝	就寝

することもできない——からである。したがって僧院組織には、出家者の身の回りの世話を手伝う在家者が欠かせない存在となっている。

こうした在家者は、ミャンマーでは「雑務人(Mi. weiyawisa)」と呼ばれている。雑務人は寺男/寺女・ティーラシ⁽¹³⁾として僧院に住み込む場合もあれば、必要に応じて僧院に通う場合もある。彼/彼女らも広い意味では僧院組織の一員であるといえよう。また僧院によっては、「善行者(Mi. phathudo)」と呼ばれる在家者がいる場合がある。善行者は、一般的には白い服を着て僧院に寝泊まりし、僧院の諸々の雑務を手伝う在家者を意味する。以前は老後に善行者となる習慣があったようであるが、現在ではもっぱら沙弥になる前の少年たちとなっている。つまり沙弥生

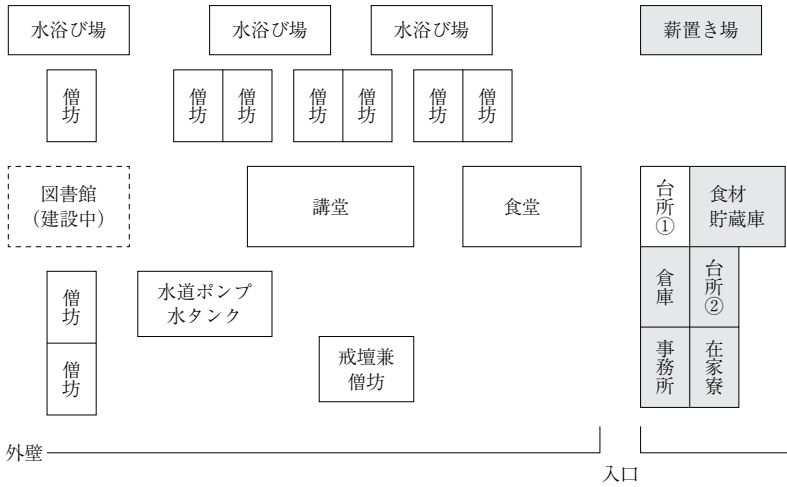


図2 X僧院の空間構造

活の前段階として、五戒を守る在家者として僧院に住むのである。

雑務人は、たとえば調理、掃除、勧進（布施者探し）、農作業など、出家生活をサポートするような様々な活動に携わる。

しかしその最も重要な役割は、「浄人（P: kappiyakaraka）」としての役割にある。浄人とは、一言でいえば、出家者の代わりに出家者の財を管理する管財人である。たとえば余分な食料品があったとしよう。その場合、僧院の敷地内に浄人が所有する貯蔵庫をつくり、そこに保管する。そしてこのようにして蓄えた食料品を在家者や沙弥が調理して、比丘に布施するのである。

同様のことは、食料品以外の様々な物品、たとえば袈裟や鉢などについてもいえる。つまり余分な袈裟や鉢は、浄人に預け、必要になった場合に再び布施してもらおう。こうした方法をとることによって、出家者は様々な財を「所有せずに所有する」ことが可能になるのである。たとえば図2はX僧院の空間構造を示したものであるが、網掛け部分は在家者の領域であり、そこから僧院は常に布施を受けることができる。

また同様に、浄人を介在することによって、出家者は金銭を取り扱うことも可能となる。先述したとおり、出家者は金銭の受領・使用を禁じられている。しかし浄人が金銭を受け取り、それを管理し、使用する分には問題ない。このように僧院組織における在家者の存在は、出家者に課せられた律の制約を緩和し、出家者が効率的に「食」を所有・消費するための重要な条件となっている。

3 僧院組織の問題

しかしこうしたシステムは、常に有効に機能しているわけではない。たとえば出家者自身が律を遵守するという意識が低いならば、このように在家者を介在させるという面倒くさい方法は取りたがらないだろう。しかしその一方で、「律を守りたくても守れない」という側面もある。なぜなら在家者の助力は常に十分に得られるわけではないからである。

第一に、特に都市部の僧院においては、雑務人の量的不足という問題がある。この問題を考える上で重要なのは、こうした在家者の助力もまた、労力提供という布施の一種であるということである。つまり布施を十分に得られるか否かという問題がつきまとう。現在のヤンゴンでは、住職の両親や親戚か、あるいは就学や就職のために都市へやってきた地方出身者（住職と同郷・同民族であることが多い）たちが雑務人の役割を果たしていることが一般的である。しかしこうした在家者たちに対しては、少なくとも食事や寝る場所などを提供する必要がある。あるいは別個に雑務人を雇うのであれば、給与を支払う必要がある。その余裕がない僧院では、雑務人なしでやっていくしかない。

第二に、雑務人の質的不足という問題がある。たとえば僧院財産を管理する雑務人が不正を働いたり、金銭を持

ち逃げたりするというトラブルは枚挙に暇がない。財産を他人に管理させる以上、僧院はこうした不正の温床となりやすい環境となっているのである。また以前は、出家者の所有物を盗むことは地獄行きの大罪と恐れられていたが、最近ではこうした意識も希薄化している。したがってそうしたトラブルに実際に巻き込まれたり見聞きしたりした出家者が、在家者を介さずに自分で財産を管理したいと思うのは仕方がないことである。またより一般的には、出家生活に対する理解不足という問題がある。つまり出家生活にはどのようなルール（律）があるのか、出家者どどのように接するべきなのかについて、在家者がきちんと理解していないことが多いのである。

以上は僧院レベルでの問題であるが、出家者個人に目を向けると、問題はさらに複雑になる。なぜなら一見、在家者の手伝いが多くあるような僧院においても、その役割は僧院レベルにとどまり、出家者個人レベルまで行き届くことは少ないからである。その場合、律遵守の生活を送るためには、出家者が個人で在家者に浄人の役割を依頼する必要がある。ただしその場合は、何らかの見返りが必要だったり、あるいは移動する場合には、在家者の分の料金も支払う必要が生じたりするなど、余計に費用がかかる。そのため「律をきちんと守れるのは裕福な長老だけ」といった声がしばしば聞かれる状況となっている。つまり「律を守りたくても守れない」という側面がある。

こうした問題が集約されているのが、多数の出家者を抱える都市の教学僧院である。つまり教学僧院での生活にある。たとえば第二章でみたように、マンダレーやバコックなど教学の中心地となっている場所にある教学僧院は、食事の確保を個々の出家者に任せているような僧院も多い。学生が多すぎるため、僧院レベルで食事を提供することが不可能だからである。その場合、学生たちは授業の合間をぬって托鉢に出かけるか、あるいはその時間が

なければ金銭を用いて購入することになる。しかし浄人がいるようなケースはまれであり、その場合はほとんど不可避免的に律を違反することになる。

一方、ヤンゴンの教学僧院では、基本的な「食」はすべて僧院によって保証されている場合が多い。しかしそれでもなお、文房具・本・日用品などの購入や、移動費用などは学生たち自身で工面しなければならない。ある教学僧院の学生たちに聞いたところ、年間に七万〜一〇万チャット（≒七〇〇〇〜一万円、二〇〇七年時点）ほどかかり、それを両親や師僧、個人的な支援者などに支援してもらっているとのことであった。こうした金銭をもとにして、必要なモノを購入したり移動したりしているのである。しかしこうした金銭の管理をしてくれるような浄人はいない。したがって学生たちは自分で金銭を管理し、使用することになる。

さらにこのような受蓄金銀戒の違反は、学生たちのさらなる律違反の呼び水にもなっている。村出身の一〇代から二〇代の若者たちにとって、みるものすべてが新しい都市は、刺激に満ちあふれた空間である。そうした空間に、金銭という万能の道具を手に出ることによって、出家者に禁じられている様々なことを行ってしまう。また都市は匿名性が高いため、律を守らなくても恥ずかしくないという事情もある。これらの要因が、教学僧院の学生たちの律違反を助長しているのである。

その一方で、こうした状況に対し、多くの教学僧院は十分な対策を講じていない。仏教試験の合格率が高いほうが学生は増える。学生が多いほうが布施も増える。このように仏教試験を優先することが、教学僧院における学生の管理体制の緩さにつながっているという側面がある。この問題は、単に教学僧院だけの問題にとどまらない。なぜなら第二章でみたように、教学僧院はミャンマー仏教の要であるからである。

若い出家者たちは、都市部の教学僧院で教学の修練を積む。しかし都市部の教学僧院での生活は、金銭を自分で取り扱う必要があり、それが各種の律違反を誘発する。また、律違反が厳しく取り締まられることもないため、学生たちは次第に律違反に慣れていく。このように都市部の教学僧院は、律を軽視する学僧の生産拠点となってしまう。そしてこうした律軽視の学僧が各地の僧院を率いるようになるため、結果として律の弛緩傾向が拡散することになる。このように教学僧院における律の弛緩は、ミャンマー仏教全体の質に関わる構造的問題となっている。

四 まとめ

各制度宗教は、「幸せ」とはなにか、そしてどのように「幸せ」を実現することができるか、という教義を提示している。制度宗教における宗教実践とは、それぞれの「幸せ」を実現することを目指す活動として定義できる。それは単に修行や儀礼といった特殊な活動だけではなく、信徒の生き方全体に及ぶものである。そしてその基礎をなしているのは、「食」にまつわる諸実践である。人間のあらゆる活動は、「食べる」ことを前提として成り立っているからである。

それでは各宗教の信徒たちは、実際にどのように「食」を獲得・所有・消費しているのか。この問題について、本論文ではミャンマーにおける上座仏教僧を事例として検討した。そこから浮かび上がってくるのは、「宗教」と「世俗」が複雑に入り乱れた状況である。一方で、上座仏教は涅槃という理想を掲げ、それに至る手段として出家生活を設計している。その設計図の一つが、出家生活を規定した律である。しかし現実の出家生活は、「宗教」に

分類されるような形而上学的な志向によってのみ、動いているわけではない。その律を実際に生きるのは、生身の身体をもった出家者であり、そのことが現実の出家生活に大きな影響を及ぼしている。

本論文でみたように、出家する理由、僧院を渡り歩く理由、僧院組織の構造とそれに起因する問題など、出家生活の様々な側面に影響を与えているのは、これまで「世俗」として切り捨てられがかった「食」という問題である。もちろん、こうした「世俗」的な要因ばかりを過大評価するのもまた同様に問題である。重要なのは、「宗教」と「世俗」の区別に拘泥することなく、教義的理想、経済的問題、その宗教の制度的位置づけ、社会的環境など、様々な要素の絡み合いの中で、実際に信徒たちが様々な制約を抱えつつもそれらにどのように対処し、それぞれの生を紡ぎだしているか、その実態を丁寧に記述することだろう。本論文で試みたのは、このような意味における宗教の「生き方」学である。

注

- (1) 本論文では仏典用語であるパーリ語を「P」、ヒンディー語のローマ字表記を「M」で表す。
- (2) T. Asad, *Genealogies of Religion: Discipline and Reasons of Power in Christianity and Islam* (The Johns Hopkins University Press, 1993), p. 296 (中村圭志訳『宗教の系譜——キリスト教とイスラムにおける権力の根拠と訓練』岩波書店、二〇〇四年、三七三頁)。T. Asad, *Formations of the Secular: Christianity, Islam, Modernity* (Stanford University Press, 2003), p. 280 (中村圭志訳『世俗の形成——キリスト教、イスラム、近代』みすず書房、二〇〇六年、三七六頁)。
- (3) 佐々木閑『出家とはなにか』大蔵出版、一九九九年、一六九頁参照。
- (4) 本論文の議論を、「食」を含めた財全般に広げて展開したのが、藏本龍介『世俗を生きる出家者たち——上座仏教徒社会「ミヤンマー」における出家生活の民族誌』法藏館、二〇一四年、三二一頁である。
- (5) この数値は少なくとも雨安居の三ヶ月間を出家者として過ごす者の数を示しており、毎年、乾季に膨大に現れる一時出家者

- (沙弥が多い) は含まれていない。
- (6) 宗教省発行の雨安居僧籍表による。
- (7) 都市としてのヤンゴンにはヤンゴン管区にある四つの県をまたぐ形で、三三の郡から成立している。ミャンマー第二の都市であるマンダレーも同様の形態である。そこで混乱を避けるため、以下では「ヤンゴン」、「マンダレー」と表記する場合には都市を意味することとし、管区に言及する場合には「ヤンゴン管区」、「マンダレー管区」と表記することにする。
- (8) 「僧院学校 (Mi. poundogyihin pinnyawei kyau)」は、仏教教育ではなく、世俗の教育を提供する僧院を意味する。公立学校が未だない村落部や、貧しくて公立学校に通えない都市部の子供たちが通う。二〇〇六年現在、全国に一三三三校（小学校一〇五五校、中学校二五六校、高校二校）あり、約一九万人の子供たちが教育を受けている。中央統計局発行の *Statistical year book 2007* を参照。
- (9) ウ・ウエーブツラ『南方仏教基本聖典』中山書房仏書林、一九七八年、一三六一―一三七頁参照。
- (10) 詳しくは、佐々木閑『出家とはなにか』大蔵出版、一九九九年、一三八―一四一頁および林行夫『功德』を食べる人びと——東南アジア仏教徒の宗教実践と食』（南直人編『宗教と食』ドメス出版、二〇一四年）、一六二―一六四頁を参照のこと。
- (11) 小規模な僧院であれば通常、僧院を管理するは住職一人である。ただし大僧院であれば、その業務内容は極めて膨大なものとなるため、「副住職 (Mi. tait out)」、「管理僧 (Mi. tait kyat)」、「僧坊長 (Mi. kyau poungyi)」といった幹部僧が存在し、中間管理業務を担っている場合がある。
- (12) ①殺生をしない、②盗みをしない、③一切の性行為をしない、④嘘をつかない、⑤酒を飲まない、⑥午後には食事をとらない、⑦歌舞音楽を楽しまない、⑧化粧や装飾品で身を飾らない、⑨大きいベッドや高いベッドに寝ない、⑩金銭を受領・使用しない。
- (13) 現在のの上座仏教徒社会においては、制度上の比丘尼の継承は既に途絶えており、正式な出家者は男性に限られている。しかし在家という立場ながら、事実上の出家生活を送る女性修行者たちが存在し、ミャンマーでは「ティーラシン (Mi. thihshin)」と呼ばれている。

The Monks' Life Shaped by "Food"

A Case Study from Myanmar

KURAMOTO Ryōsuke

Theravāda Buddhist monks are strictly limited by the Vinaya (monks' rules) with regard to their way of gaining, owning, and consuming foods. The most important principle for them is to live as beggars, and to depend on *Dāna* [religious gifts] given by lay people. In Theravāda Buddhism, such a monk's life is thought to be the optimum approach—though not the only one—to achieve *Nibbāna* (the doctrinal ideal of Theravāda Buddhism). Monks, however, cannot live without any food. This is an enormous dilemma for a monks' life.

How do monks deal with this food problem? How does this problem influence the religious practice of monks? In this paper I adopt an anthropological approach that is characterized by fieldwork and that aims to reveal processes of trial and error in the monks' life, taking Myanmar as an example. By doing this, I try to clarify one side of the religious practice of monks, for example, the reason why they become monks, the way their life courses develop, the way the organization of a monastery is formed, and so on. And I also insist that these facts could not be adequately discussed if we are particular about the distinction between the word "religion" and "secular," which is an idea of modern European origin.